

# 縄文式文化の起源と押捺文土器の発達

賀川光夫

はじめに

- 一 縄文式文化の定義 —問題提起—
- 二 細石器文化と狩猟社會
- 三 弓矢（細石鏃）の発生と土器の発達
- 四 縄文式文化東西の關係  
おわりに

## はじめに

わが国の縄文式文化の起源が、はじめの段階では、山内清男、八幡一郎などの土器、石器の研究で大成されたことは周知の如くである。そして、白崎高保の稲荷台式土器の提示によって捺捺文土器の祖形が論議された一九四〇年代には、江坂輝弥の精力的研究の成果があった。当時は南関東を主要な場所として縄文式文化の可能な上限を探索した時代である。縄文式文化の研究が、組織的に研究対象として發達していったのは一九五〇年代以降といつてよい。この時期から<sup>14</sup>Cによる年代測定がはじまり、つづいて西南日本や信越地方における隆帯線文、爪形文土器が發見され、土器の發生が一万年以上も前の時代に逆ることが明かとなった。この土器の起りについでの研究は、杉原莊介、芹沢長介などによる夏島貝塚の研究<sup>1)</sup>、芹沢長介、鎌木義昌の長崎県福井洞穴の調査<sup>2)</sup>、江坂輝弥の愛媛県上黒岩洞穴の研究<sup>3)</sup>などによって主演された。そして、それぞれ、貴重な縄文式文化の起源論を述べている。これに対して、山内清男は隣接地帯(大陸)との關係をもとに、植刃にともなう新潟県本ノ木や小瀬ヶ沢、長野県管平の土器をシベリヤのイサコボ期(BC 4,000~3,000)の次の時期にあて、その古さをBC 3,000前後として、<sup>14</sup>Cの測定に反論している。

この日本における縄文式文化の起源の論述は、細石器や、植刃にともなう文化として大陸に対比する論法ですめられていることは両者とも共通であるが、<sup>14</sup>Cをもととすることを考えと否とでは年代に大きくへだたりをみる。そしてこの問題の底流には土器の發生という問題が神格化された如く存在しているのである。土器の出現という問

題は欧米流の考えではさして問題にはならないのであって、農耕文化の存否如何によって新旧両石器文化を論じているのである。したがって中東の如く「無石器新石器時代」<sup>⑤</sup>なるものを設定してイリコー、ジャルモなどに新石器時代を提起した。勿論日本では縄文時代の頭初農耕のおこなわれたことをしめすものがない以上、右の如き欧米の論法をあてることはできないが、問題の提起を土器の発生とともに背後社会の顕著な相異をもとにして縄文式文化の問題を考える必要がある。ここでは縄文時代の狩猟民が、植刃鉞（投げ鉞、槍）に対して弓矢の発達ということにその意義を求めて、新たに「縄文時代の起り」について見解を世に問うことにしたのである。

### 一 縄文式文化の提義—問題提起—

最近の縄文式文化の起源の問題を論述した興味深い論文は、鎌木義昌の「縄文土器、縄文文化の起源について」<sup>⑥</sup>につづいて、芹沢長介の「旧石器時代の終末と土器の発生」<sup>⑦</sup>、及び江坂輝弥の「日本先史地理学序説」<sup>⑧</sup>である。三者とも、共通して、西南日本の隆帯文土器と、これにともなう細石核、石刃、有舌尖頭器の問題を注目し、土器をともなわない石器と、土器をともなう石器について注意深く論説して、しかもその関係を周辺地域の共通した問題として展開している。したがっていずれも傾倒すべき論文であることには間違いない。そして更に注目すべき点は三者とも石鏃、つまり、鏃形をした石器に対して、ある程度の考慮がはらわれていることである。

さて、「縄文式文化」という名称をもちいることは、筆者もさして意味あるものとは思っていない。何故なら土器形式を北海道から、九州まで、一枚の紙にならべて、その前後関係を論ずる愚かさは、日本の先史時代を北

から南まで、文化の内容や生産手段の変化にもかゝらず「縄文ころがし」の技法で統一しようとする考え方で、これは、脱皮しなければならぬ。そこで無土器文化という曖昧な名称を旧石器文化とよぶことが適當であれば、当然縄文式文化を新石器文化で統一すべきである。この呼称の問題はともかくとして、本稿ではやはり縄文式文化とよぶことにする。土器の発生をそのまま新石器文化、つまり縄文式文化の起源と考え、これに縄文草創期という一時代を冠することも、どうかと思う。前記三者の論文で共通して考慮の一つにしている問題に弓矢の発達がある。ここであらためて縄文式文化の内容を深く掘り下さげ、その生活をかえりみてみよう。勿論、地域と時代差による生活内容の変化はある。だが一貫して、原始、素朴の狩猟民的な生活以上のもではなく、生産技術も、縄文式時代にあつては「斧と匙と鏃」の文化と称するものであつた。西日本の早期遺跡や、中部地方山岳地帯における中期の大集落が存在することはあつても、そこに族長的社会が形成されたという証拠は全くないのである。かりに狩人以外の特種な階級があるとすれば、それは宗教的な司祭者であつたらう。現在の未開地の土俗例にもひとしいありかたである。したがつて農耕がおこなわれるまでの間、縄文時代一貫した状態で斧と匙と鏃は主要な生産の器具でこの時代の生活を象徴するものといつてよい。特に鏃は狩り人の主要な道具であつて、旧石器時代の終末の組合鋸や投槍りと対照される。鎌木義昌は、土器の発生と石鏃の有無の矛盾を地域的に指摘して、この鏃の発達に注目している。芹沢長介は、九州における石器の変遷の表をしめして、主として福井3層以降細石刃核と土器の出現を述べていたが、福井1層には鏃が押捺文と共伴して、縄文早期と隆帯文や爪形文の福井2層以下と区別している。この福井における状態、福井の層位を理解するのに便利で、しかも芹沢理論の説得

力をしめすものとしてトルコのアナトリア山脈の南部ベルディビイ洞穴の層序と、石器の組成、土器の出現をあげている。この論説にもベルディビイ文化B層の土器とともに石鎌、幾何学形細石器や有舌尖頭器などの組成、C<sub>1</sub>層の細石器組成のなかに石鎌二点の存在をしめしている。そして西アジアにおいても、土器の発明が農耕の開始に先行するかもしれないことを、ベルディビイ洞穴のB層は予想させる、と述べている。芹沢は、ベルディビイにおける層位と、そこから出土する石器や、土器の組成が福井のそれと相似た状態であるところを指摘し、同時に弓矢の発達にも注意をはらっている。しかし、福井の細石器とベルディビイのそれは、石刃と幾何学的細石器とが相異しているように、組成に大きなちがいがある、福井は、細石刃核の単純でなるの対して、ベルディビイ洞穴は、多数の剥片石器の組成をみる。したがって同じ時代の別の系統の文化ということにもなりかねない。しかし、芹沢が、この遺跡を比較したことは、東西の相似た二つの遺跡における「過度期」的「中石器」の状態を明確にしたいからであったと推察される。そして、同じく土器の発達と、弓矢の発生から、新石器文化の祖型を福井や、ベルディビイに求めるといふ考えであったと理解する。そして結論として中国やソ連との提携によって土器の起源を解明してゆくことが、今後の課題だと述べている。この点については大いに期待しなければならぬ。

鎌木義昌は、三つの問題をあげて縄文式文化の起源問起の結論としている。一、土器の誕生は福井洞穴3層の隆帯文土器と、細石器文化で、この祖源は、中国大陸の細石器文化である。二、縄文式文化の誕生は、本州にある細隆文土器と、石鎌、有舌尖頭器の文化をもってあてらるだろう。——この祖形的文化は福井3層である。

三、縄文式土器の誕生は、押捺縄文、撚糸文土器からすべきであり、爪型文や、隆帯文は、縄文式土器と称するものの本当の意味であったかどうかは疑わしい、と結んでいる。この鎌木の考えは芹沢と若干意見を相異する。

つぎに江坂輝弥は、北海道大学の湊正雄によるトツタベツⅢ水期<sup>10</sup>（ヴェルム亜水期Ⅲ）の海面低下期に彫刻刀細石刃などの製作技術が大陸から東と西日本に分かれ影響されたとし、土器の発生はアジアからの影響と、わが国の自性との両者の可能性を述べ、その決定を今後の研究にまつとしている。そして、日本における最古の土器文化は、

石鏃発生以前の文化であつたらしいとして、細石刃や有舌尖頭器と隆帯文や爪文土器をあげ、次第に投げ槍から鏃に移り、薄手無文土器と小形石鏃との関係を周辺地域からの弓の渡来とみている。ここでも土器の起源を隆帯文にみとめながらその起りを自生説の可能性を残している点が注目され、そして弓矢の発達に注目している。

以上三者の縄文式文化の起りを整理してみよう。

鎌木は、草創期とする隆帯文や爪型文土器は縄文式文化の祖型とすることに疑いをもち、有舌尖頭器や、石鏃の弓矢の存在を重視する。

芹沢は、福井洞穴の第2、3層は石器製作上から見れば古い伝統の上にたち、土器の存在という点から見ればあたらしい時代に一步ふみこんでいる。この過度期をふくめて日本の中石器時代という呼称で区別してもよい。そして福井2、3層や、上黒岩の土器、石器の組成が度々アジア一帯で明かにされるならば過渡期的な文化のもつ意味も明かにならうという。

江坂は、日本の最古の土器という表現をしているが、隆帯文や爪型文土器と弓矢の存在を併せ考え、縄文式文

化の起源とする。

以上で、土器の起源と、縄文式文化の源流を考察した鎌木以外、土器の起源にはふれているがこれをただちに縄文式文化の起源とすることにはふれていない。しかし案に縄文時代の上源をここに認めようとする場合には、疑いをもたないのである。

さて、ここで、芹沢は、石鏃について資料としてそれもちい、鎌木、江坂は明確に石鏃、弓矢の問題にふれている。特に江坂は、土器以前の細石器文化、直鋸鏃 (Trapezoid) に注目している。弓矢の発展は、芹沢の石器と仮称する過渡期文化とは明確に異なり、その発達は上黒岩6層の薄手無文土器 B. P. 1085 + 320 や、川原田洞穴<sup>11)</sup>層など、小形石鏃の発見や、小形有古尖頭器などの発達を重視したい。そして縄文式文化の源流の西日本では、弓矢の発達という点を問題の提起としたい。つまり、西日本における縄文式文化の起源は、弓矢の発達であると考え、これを問題提起とするのである。

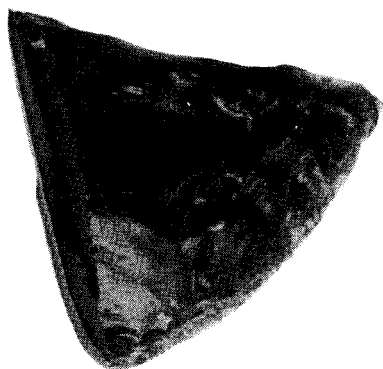
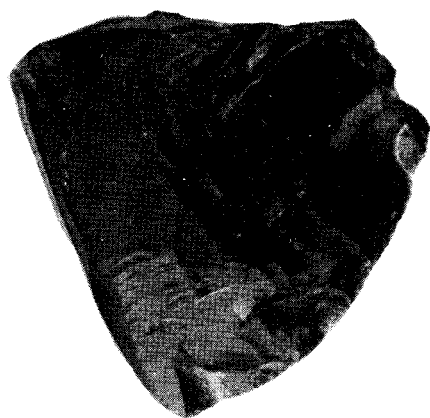
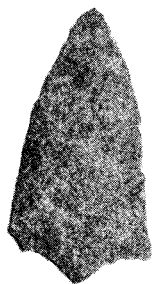
細石刃や尖頭器をもって投げ槍 (槍) を基調とする狩猟民に対して弓矢をもつ狩猟民の生活のちがいは、芹沢の中石器的 (過渡期) 文化と、鎌木の縄文式文化の二つの様相である。また、この両者の断絶は、江坂の考える如き、トッタベツ III 氷期などの海面底下の時期の前後におこった交流と、断絶によるものとも考えられる。いずれにしても、三者の意見は大局で同じであり、これをもとにしても、弓矢の発達という問題が起こる。有舌尖頭器や、鏃形の石器の発達は、斧や匙と同様、縄文式文化の象徴である。同時に石鏃は、その狩猟民として、縄文式文化の注意すべき道具の一つであり、縄文時代生産の更に重要な象徴である。

## 二 細石器文化と狩猟社会

日本の旧石器文化の層位的研究の私案として芹沢長介は、各地の調査研究の成果を表としてまとめ、それぞれ層位、<sup>12</sup>C、石器の組成などから新旧の序列を作っている。また「上部ローム期上位の石器群」<sup>13</sup>には、石器の発生を前後する細石器の問題を図表で細かく述べている。このような旧石器から土器発生に関する論文は、各種石器の特徴などを論ずる場合に多くおこなわれているが、この表は芹沢の私案としてはもっとも便利なものである。ところで、土器の発生は福井3層からで、縄文式土器、石鏃の発達はB.P. 10,000 を少しさかのぼり、太線の矢印で記入している。この表でみるかぎり、芹沢は、福井3層など隆帯文など細石器と共伴する土器は、縄文式土器とみないといえる。そして「弓矢の使用が一般化し、有舌尖頭器がついに鏃としての形態をそなえるようになった 11,000 ~ 10,000 B.C 頃、四国、本州の有舌尖頭器文化も、また北九州の細石刃文化も、あたらしい縄文文化のなかに姿を没するにいった」と述べているが、つづいて「私達が大陸え縄文土器の起源を求めてゆくことは不可能であるが―大陸で類似土器を求めることは可能である。」と述べ、縄文式文化の起源を隆帯文と細石器との関係で追求しようと試みていることが明白である。その考察に関するかぎり、縄文式土器の起りを大陸に求めるといふ試みがうかがわれる。

さて、細石核と、石刃とのみという石器の組成である福井2、3層は、稀であるが、それだけ単純に時期を考へ、狩猟生活を考えることは便利である。しかし、他の石器を全くといってよいほど含合しない点では稀な遺跡





第1图 有舌尖頭器(上黑岩)と細石核(福井)

とすることができる。有孔円盤（石製、土製）など若干の共伴遺物の存在はあるにしても、この洞穴に参む人達は投げ鉞のみを製造していたことになる。そのような意味で、福井洞穴の2、3層の如き細石刃核を單純に出土する遺跡は、他に類例が少なからう。中国東北部のオロスやジャライノール文化の細石刃に共伴した隆帯文などがあるにしても、細石刃核以外に若干の石器の組成がり、また福井4層の如く土器を伴わない細石刃核の出土状況もあまり明かでない。一般に蒙古やシベリヤに分布するといわれるが、福井の如き單純さで、比較されるものはないのではなからうか。この点筆者は浅学で確たる自信をもたない。しかし、芹沢自身が対比資料としたアナトリアのベルディビイ洞穴でも、そのB、C層の石器の組成は、幾何学形細石器（半月形、梯形、マイクロ・ピュラン、サイド・ブレード、スクレパー）有舌尖頭器などで、石器の組成から同一のものとはいえない。したがって福井洞穴の如き細石刃核の單純な石器は現在のところむしろ稀であるといえる。そのような点で、福井の細石器文化は、狩猟民としての生活を規定することは容易である。シベリヤや中東地方の一部でみられる如く、それは植刃による投げ鉞りによる狩猟であることは確かである。そして、中東の山羊、羊、牛の野生種が存在し、シベリヤのトナカイなどの捕獲に適当な道具といえる。しかし今日、中国や沿海州で明かな細石刃の出土地では福井洞穴ほど單純に細石刃核のみを生産しているのではないから、石器の組成がちがうように狩猟のありかたも当然ちがってくる。

この問題を解決する問題として江坂輝弥のトツタベツⅡ、Ⅲ氷期に対する大陸と日本の関係は興味深い。四国や、北海道の早期遺跡で發見されるオオヤマネコは、トツタベツ氷期の海面低下期に、シベリヤから北海道へ、

そして朝鮮半島から西日本に広く移動したものと。勿論、この時期に隆帯文や爪型文土器、そして細石刃核が渡来したと推定される。人々は、これらオオヤマネコやニホンザル、アナグマ、それにイノシシなどが食糧とされたにちがいない。当時日本は大陸と陸で続いていたとはいえ、大陸の縁端であるから、気候条件は他に比較して、オオヤマネコなどは異状に繁殖したものと考えられる。したがって、日本列島に棲む人達は、組合せ鈎や、投げ槍のみで多くの獣類を捕食することができた。単純な生産技術、細石核から機械的に石刃をおとす工法のみで、多数の獣類が捕獲された。福井洞穴4層以下の細石刃核の狩猟人は、このような単純生産で食糧を量産することができたものと考ええる。そして、今日まで、このような石器の生産は、西北九州を主に注目されていたが次第に九州全域に広がり、福井2、3層の隆帯文土器の発達へと進む。

福井の細石刃の工法は芹沢長介の新しい見解<sup>14)</sup>が発表されているが、石材や、石核の考察からもっと単純な技法から発達してゆく過程を、西九州の各地から発見される細石刃核で確かめることができる。そして、福井3層までの工法の過程で、それぞれの遺跡が、福井同様、細石刃核のみであることが再確認される。それは単純素朴な生産技術で、量産される食糧による狩猟の容易なことであって、そのことを含めて、細石刃核をもって生活をする、当時の文化は、むしろアジア東辺（日本を含めて）の特殊なものといえるのではあるまいか。そしてこの細石刃核の単純文化を広く西アジアまでの範囲で同一視することより、アジアの東縁に位置する日本などの地域にみる特殊な生産機構としてあり得た当時の技術で、そこから西への拡がり考えたほうがよい。土器の発達もそこから西への広がりをはじめるのであろう。そして、日本各地や、半島、大陸で類例を増せば増すほど、それが特

殊で、細石刃核の単純遺跡であると同時に、その起源がアジア東辺、特に日本列島において育成、発達されたことが明かになるであろう。ここ数年の間、九州ではそうした遺跡の発見があいつぎ、ますますそのような感じが強い。

さて江坂輝弥の有舌尖頭器は、尖頭器、すなわち投げ槍から発達（尖頭器としての退化）して登場した鏃であると考える。これは有柄の鏃と大差ない形態であるが、鏃としてはもっとも古式型であり、それゆえ改良の必要があった。縄文晩期に同形に近い扁平鏃が登場するが、これは鏃そのものの退化型（用途の改良）であるが、同時にこの有舌尖頭器 Arrow-point は鏃形に改良される必要があった。江坂輝弥は、この鏃形石器は、上黒岩洞穴 9 層 B.P. 10,086±30<sup>13)</sup>に小形鏃として出現されると考えている。この時期は無文土器を出土する文化層であって、この同じ状態を大分県川原田洞穴<sup>15)</sup>において確認しているのである。川原洞穴における<sup>14)</sup>Cは英国にて調査すべく資料を発送したが、当局の不注意で紛失し、実年代を測定できなかった。しかし、押捺文土器とは間層をもって区切られた無文土器単純層より発見された事実から、上黒岩と同じ一万年前後の時期と推定できる。ここで弓矢の存在は明確となった。そしてあらためて鎌木義昌の縄文式文化の誕生が、縄文式土器と、縄文式文化の起源という問題についての定義に疑問をなげながらも、押捺縄文、撚糸文土器に求めることをあらためて再確認し、更に一部西日本での新しい問題を提起しよう。また、当然の如く、細石刃核、そして隆帯文、爪型文土器の単純生産（福井 2、3、4）などの時代、芹沢長介が「旧石器時代の終末と土器の発生」で述べた如く、「中石器時代」をおくべきであると考ええる。そしてこの中石器時代は、今後日本列島や、シベリヤ、朝鮮、中国大陸などで、

数多くの遺跡が発見されるであろう。そして、このアジャの東辺に細石刃核の単純遺跡が、それ自体特殊な生産生活を形成して、次第に発達してゆく過程が明かにされると考える。

### 三 弓矢（細石鏃）の発生と土器の発達

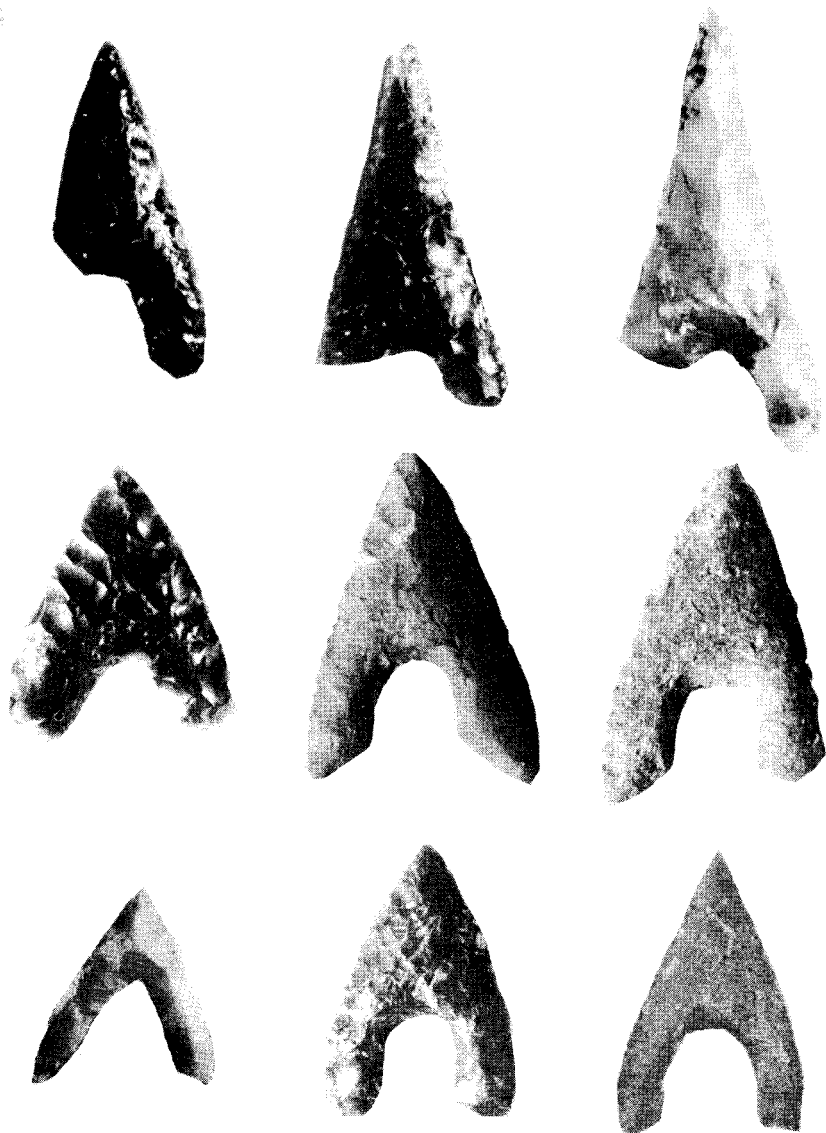
上黒岩6層と川原田Ⅹ層では、ともに層位的序列で押捺文土器に先行して薄手無文土器が存在したことを確認した。この無文土器と、川原田Ⅶ、Ⅹ層の押捺文の間には、他類土器の挿入はまずない。川原田洞穴においては、ⅩとⅦ、Ⅹ層とは、無文土器と押捺文とに分かれるが、鏃形の細石鏃が共通に出土する。この石鏃は、江坂輝弥の二等辺三角形小形石鏃とよぶものであって長さ一糎内外とする。川原田洞穴Ⅹ、ⅦⅩ層と大同小異、形態も、加工技術も全く同一である。川原田洞穴では有舌尖頭器の退化、小形尖頭器（鏃と推定）と細石刃が少量出土する。この点、川原田は細石刃と有舌尖頭器の両者から細石鏃が出現（投げ鏃―弓矢）となり、上黒岩6層は有舌尖頭器から鏃形への系列（投げ槍―弓矢）となる。また、川原田の細石鏃では石器の組成がやや複雑で剝片加工（スクレパー、尖頭器）の石器が、細石刃尖頭器などと共伴する。問題の石鏃は一糎前後の小形で、一部に剝離面を残すものが存在するが、粗雑な工法ながら全体が鏃形に整形されている。厚さも、○・三、○・二糎程度で、全体として華奢な感がする。石質はⅦ、Ⅹ層の押捺文（細かい高円文のベルト施文）共伴には、黒燧石の使用もみられるが、Ⅹ層の無文土器には、チャート、サスカイト、石英、鉄石英などの石質に変化する。この石鏃を、細石鏃と名付けておく。



第2図 細石鏃（川原田）

上黒岩6層の無文土器は薄手尖底とあるのみで精細は知らぬが、川原田においては、口径二四糎、高さ一五糎、器壁○・三糎の薄手尖底で、わりあいによく調整された無文土器である。また口径二六糎（推定）高さ二〇糎で尖底部が前者に比して尖るV字形無文土器がある。この層は、他に土器の混入がなく、無文尖底の単純層といえることができる。ともかく、土器、石器の組成はごく良好であって、<sup>14</sup>Cの測定があれば標式として充分注目されたであろう。

川原Ⅷ、Ⅹ層は口径二二糎、高一七糎ほどの薄手尖底土器の表面に無文帯をはさんで、細かな縞目押捺文が四段、ベルト状に施文され、これに細石鏃が共伴する。しかもこの細石鏃には黒燧石を使用し、<sup>12</sup>と石材の組成を異にする。しかし、従来押捺文の祖形式と考えていた早水台Ⅱ<sub>下</sub>層<sup>16</sup>の山形、楕円文などの尖底土器（黄島B. P. 8, 400 + 350）に共伴する長二等辺三角形の肉厚調整の整美感ある完成鏃と比較すると大きな差がある。江坂輝弥は半弓と大弓を中期末から後



第3图 早期石鐮（旱水台）

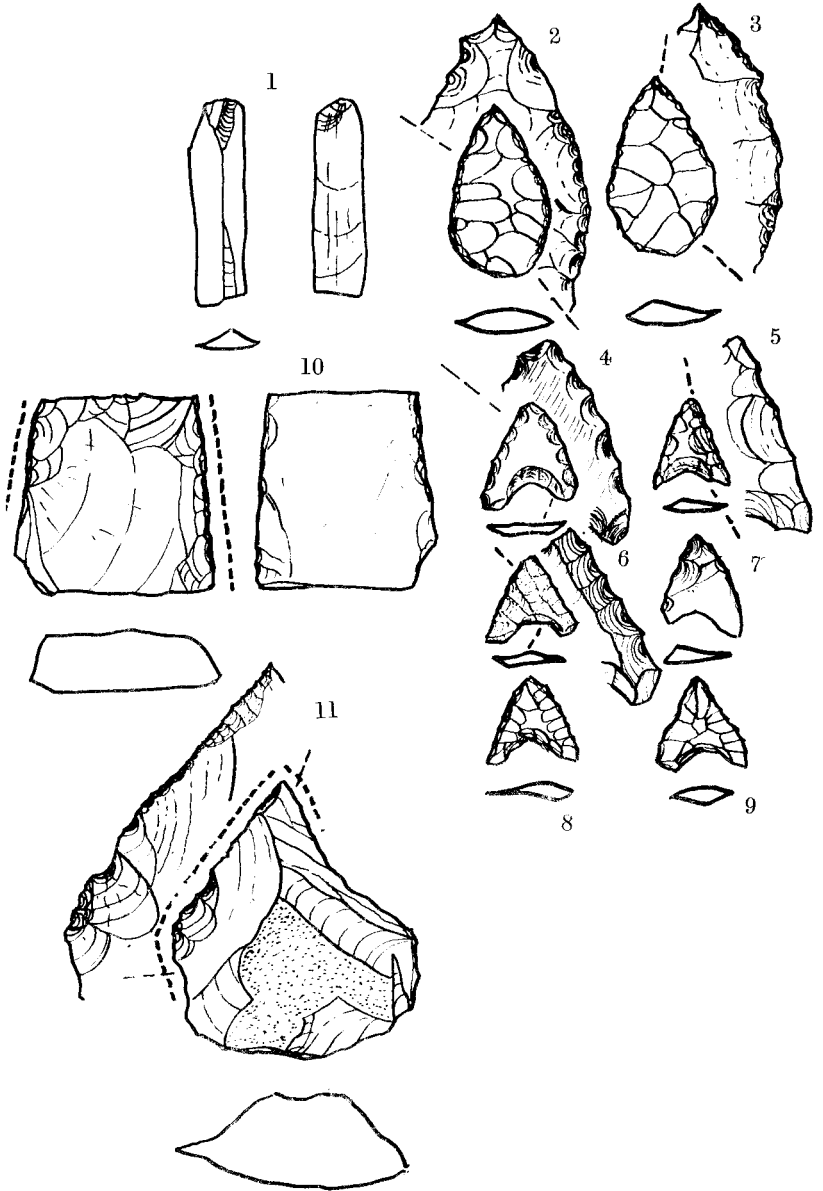
らためて、上黒岩、川原田、早水台など、西南日本の縄文式文化の発達に石器の組成を返りみる必要がおこる。川原田Ⅷ層の押捺文ベルト施文の小形押捺文土器に有舌尖頭器から発達したとみられる尖頭器が存在し、それが細石鏃と共伴する。それは扁平剝片をもちいたもので、上黒岩のⅥ、Ⅷの細石鏃と、やや大形の尖頭器に類似する。

早水台における石鏃は、整美された肉厚のものが主体であるということ述べたが、鏃の大型化の過程で、剝片を粗雑に加工した鏃があらわれ、弓矢の必要と、技術の過度的状態も見逃せない。しかし、全体として鏃は大型化し、整美された肉厚の長二等辺三角形、鋏形石鏃へと向う。この間において、やはり小形扁平の剝片を使用した尖頭器と、その大形の尖頭器がみられる。長さ二・五糎程の剝片利用の尖頭器は鏃であろうが、江坂輝弥の指摘する如く半弓であれば、長さ五糎内外の厚味ある剝片を使用した尖頭器は投げ槍であろう。ここには、有舌尖頭器から弓矢への道が明かにしめされている。そして、搔器をはじめ、磨製の斧が出現するに至ったり、石器の組成は複雑になる。そして当時の狩猟民が、一段と生産性を高度に保ち、縄文式文化への道を歩むことになった。かくして、斧と匙と鏃と鏃によって象徴される縄文式文化がしっかりと日本列島の各地に足跡されることになると考えられる。この間アジア以西では農耕をみるが、日本列島は豊かな狩猟地帯であった。

#### 四 縄文式文化東西の關係

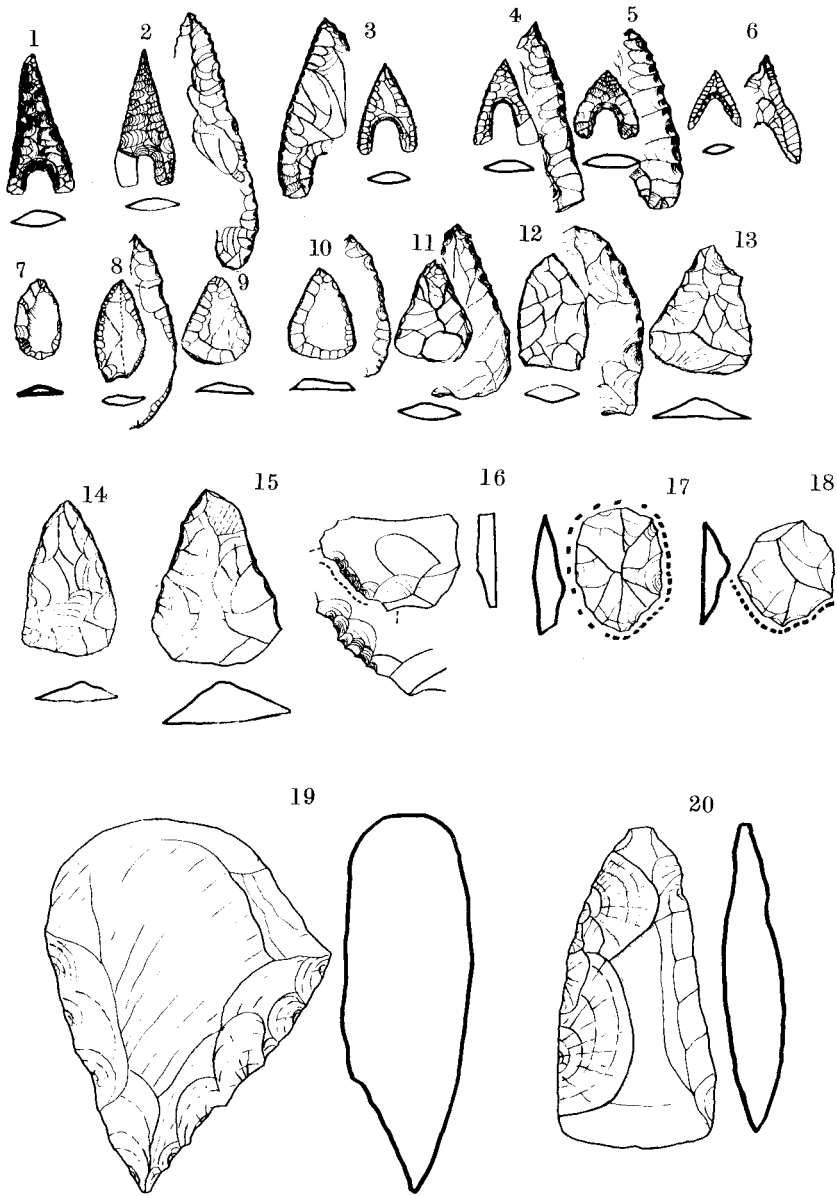
縄文式文化の起源のなかで、西日本の問題を主としてふれてきた。そして、その起源が細石刃核や、有舌尖頭





第5図 川原田洞穴の石器





器にともなう隆帯文や爪型文土器などの過渡的、「中石器」或は、土器旧石器時代をへて、無文土器と細石鏃の登場をもって縄文時代の起源とすることを考えて、弓矢の発生を重視してきた。そこでこの西日本の縄文土器の発達と、東北日本のそれとを対比する必要があるが当然おこるのである。この東西二つの縄文式文化を、同一の文化とみるところに問題があるが、それはそれなりに理由があろうと思う。さきの江坂輝弥の、トツタベツ氷期にシベリヤから北海道へ、そして朝鮮半島から西南日本に拡がる彫刻刀や、細石刃の文化が日本を支配したように、たまたま西日本では石鏃が、東日本では斧形礫器（斧）が発達し、それぞれ無文土器と押圧縄文、撚糸文土器とが対立する形で縄文式文化をむかえた。西日本ではまもなく押型文土器が主体となって早期文化の形態をととのえる結果となるが、その間の年代的観察を<sup>14</sup>Cで次の如くならべてみることにする。勿論この表は、更に精密な検討を加える必要があるが、不足の点は、石器、土器などの組成を主として補充することにした。また九州地方のまとまりある<sup>14</sup>Cは、有望なカーボンが発送後紛失するというアクセシビリティが起こり、当分の間、相当遺跡に対比して検討しなければならぬ結果となったことは残念である。

次表の如く上黒岩9層（川原田Ⅹ） B. P. 10085 ± 320 と撚糸文土器の夏島貝塚 B. P. 9450 ± 400 は縄文式文化の両立は時代的にも符合する。川原田Ⅹ層に石器の組成上大差をみない川原田Ⅶ層は、Ⅹと時代差もあまりないと考えるが、これまた上黒岩の層位と大差ない。したがって西日本の押擦文土器の発生は意外に古

<p>縄文式文化</p>	<p>14 C 年代 B. P</p> <p>黄 島 8400 ± 350 (早水台Ⅱ下)</p> <p>(川原田Ⅳ) 上黒岩 6 10085 ± 320 (川原田Ⅷ)</p> <p>押捺文土器</p> <p>捺糸文土器・夏島 9240 ± 500 9450 ± 400</p>	<p>押捺文土器 捺糸文土器 無文土器</p>
<p>中 石 器</p>	<p>福 井 2 ?</p> <p>上黒岩 4 12165 ± 600</p> <p>福 井 3 12400 ± 350 12700 ± 950</p> <p>" 4 ?</p> <p>" 7 13600 ± 600</p> <p>荒屋 13200 ± 350</p>	<p>爪形文土器 隆帯文土器</p>
	<p>(西日本)</p>	<p>(東日本)</p>

く、実際には東日本の燃系文土器と対立する結果となっている。このような問題は、<sup>18</sup>器の対立からも考えられ、<sup>19</sup>石斧と握り槌形の東西の対立にもみられる。ここで縦糸押捺文土器が燃系文土器に後続するとの考えは、影響する地域と時間的距離を考慮しなければならぬ。同様に西日本、特に九州で燃系文土器の稀薄な点を同様文化の推移による距離の關係と考えられる。したがって東と西では、それぞれ、双方の古式形態は後続するという結果になる。押捺文が燃系文土器の盛行する南関東にあってはややおくれた時代に登場するということはあり得るし、それがたゞちに押捺文土器の年代とはならない。したがって、右の<sup>19</sup>Cでみる限り、その両立はあらそえぬ結果となった。

さて押捺文土器が燃系文土器に対立する如き古さと、縄文式文化の西日本での発生に関する位置であるとすれば、この背景を検討すべきであろう。川原田洞穴XII層の無文土器と、これに共伴する細石鏃とVII層押捺文共伴石器との組成は大差なく、この間に他類文化の挿入することはない。これは前に述べた。したがって早水台II<sub>下</sub>層(B. P. 8500)と、川原田XII層(B. P. 10000)との間に同VIII層を考えると、東の夏島(B. P. 9000)に相当する時期をあてることができるであろう。現在のところ上黒岩6層や川原田XII層の如く無文土器に細石鏃が共伴する遺跡は少く、この二つの例をあげるのみであるが、いずれも層位的に間違はなく、今後の調査如何では、類例がふえよう。遺跡は二つとも岩陰で、その規模は小さい。共伴する石器は、細石鏃に、細石刃、尖頭器、スクレパーの類である。中石器の細石刃核の単純生産に比すれば、それでも石器の組成は複雑である。そして、中石器を転期として、細石刃と尖頭器の技法の残存をみるのである。早水台II<sub>下</sub>層の時期には石器の組成は更に

複雑で、遺跡は台地に移動し、広大な範囲にわたる。海浜や川筋や丘陵地帯の広い位置に集落を形成する。勿論資源をおって移動、キャンプ場所も必要で、岩陰などの小遺跡をそれにあてると、早水台などはあまりにも広大な場所である。そこには生活の本拠地としての生活があったものと推定される。遺跡は二四〇〇平方メートルに及び、土器、石器の数は夥しく、家屋址である柱穴の数も無数である。そして家屋は丘陵の尾根をさけて凹地に集まり、そこには泉がある。出土する土器から、そこには相当長期にわたる生活がみられ、同時期の人数も少くないものと推定される。石器の組成は、当時の人達の生活を物語る貴重なものであるから、その関係をみよう。石鏃は厚味のある長二等辺形に整形され、細石鏃に比して著しく大型となり、弓矢の大形化がみられる。強度の弓矢の発達、狩猟の強化を意味する。武器は、尖頭形をした握り槌形で出土数は必ずしも多くはないが、一般に存在することが知られている。斧は、局部を研磨した小形であるが、磨製石器として注目される。剝片石器としてスクレバー、ポイントなど各種形態の石器が出現する。これら石器の組成は、狩猟の拡大、生活圏の拡張を意味するもので、細石鏃による虚弱な弓矢による生産活動に比較すれば、集落の規模も含めて、はるかに大きな発達であった。葬制にしても、原始素朴な方法ではあるが、遺骸の処理法がこうぜられ、岩陰などに集葬する。長崎県岩下洞穴<sup>99</sup>では、遺骸は一体ずつ処理されるが、それが集葬状態になると、前に安置された遺骸の上に重葬される。これら岩陰の葬例は、遺骸を放置するのではなく、一定の地を定めて墓域とし、特定の葬礼がおこなわれたとみられる。川原田洞穴では、一部に頭骨を欠く遺骸があつてそれが他の部処に安置され、これは改葬か死者に対する禁忌による宗教的なものか問題は複雑である。ともかく川原田、上黒岩、岩下洞穴など、いずれも岩陰や、洞

穴に集骨状態として遺骸が集められているところをみると、集落に近い場所をえらんで、墓域を定めたこととなる。このような生活を東日本の撚糸土器を主体とする同期遺跡の状況に比較すると、弓矢の発達という点で、著しく豊であるといえる。

### おわりに

縄文式文化の起りという問題は、いろいろ整理しにくい問題をもつ。例えば旧石器、新石器という問題の処理では、磨製石器の登場、農耕文化の起源など明確な定義がある。しかし縄文式文化ということは、正しくは土器に縄目の文様を施すことによってその名称が起こり、それを拡大して日本の新石器文化を指すことも許される。しかし縄文式文化は、その大部分の時代が、狩猟文化である。そこに縄文式文化の停滞性を強調することもあつて、特殊な新石器文化と考えていた。それにもかかわらず、土器の起源は、細石刃核や有舌尖頭器から生まれたとみられ一万年以上も前にさかのぼり、世界でも最も古く発生している。このように、狩猟時代に土器が発達するということ、これを新石器とするには問題がないわけではない。したがって芹沢長介も細石刃核文化と土器の共伴を、「中石器」と断定せず、「過度期」という名称をもちいている。そして本題も、新石器文化の起源とせず縄文式文化の起源という命題をもちいた。これはいづれ再考されてしかるべきである。それはともかく、本稿では西日本の縄文の起源の定義に、弓矢の発達という問題を提起した。そして細石鎌の発生と無土器の問題から押捺土器のゆくえについての考察を試みたのである。

江坂輝弥は「縄文時代の日本の東と西」<sup>20</sup>で、福井や上黒岩の隆帯文につづいて、長野県諏訪湖底の爪型文土器とともに、東西の土器の様子を、無文土器、燃系文土器、押圧縄文土器の対立関係を述べている。鎌木義昌<sup>21</sup>は、隆帯文（細隆文土器を含める）と細石刃、細隆文と有舌尖頭器を、土器の発生と同時に分けて東西の対立関係を考えている。そして、縄文式土器の誕生は、<sup>22</sup>押圧縄文、燃系文土器であって、爪型文土器は縄文式土器とすべきではなく、細隆文土器がそれらの本当の祖源であったかどうか疑わしい、と述べる。結論的には縄文式土器の起源論と縄文式文化の起源論とがかならずしもむすびつかないということを提示している。

日本の東西でのそれぞれ土器の発生と、有舌尖頭器、細石刃核の共伴の関係は、江坂輝弥の東西二つの陸橋の問題を重視して、その背後地域の研究をまっより方法がなかるう。しかし、全体として押捺文土器に対する考慮がたらず西南日本の弓矢の発達を注意していない点は問題である。将来有舌尖頭器の弓矢としての性格が論ぜられるであろうし、押圧縄文、燃系文土器地帯においても弓矢の問題が注意されなければならないと考える。本邦の縄文式文化が、細石刃共伴の「中石器」をへて真に「新石器」という名称をつけるためには、「過度期」の投げ槍（筈）と「縄文式文化」の弓矢の発達を区別すべきでなかるうか。本稿をとちるにあたり、八幡一郎が、生活遺物は、背後の人間生活の生産や、その技術に大きな文化的特徴をあたえ、特に弓矢の存在は、縄文式文化の貴重な遺品である、と述べられたことを思いだしている。

追記のかたちになったが西日本の無文土器と、それにつづく押捺文土器の共伴石器を、あらためて観察してみると、剥片石器の類が、スクレパーにしてもポイントにしても数が多く、その組成が諏訪湖底曾根発見の石器や、<sup>23</sup>



更に上部旧石器の剥片石器に関連することが知られるであろう。細石刃や、有舌尖頭器から鏃への過程と同様、この剥片石器の問題を充分考慮して、細石鏃の起源を検討しなければならぬ。そして、西南日本での磨製の斧の登場も細石鏃とともに重要である。

縄文式文化の起りにについての研究は考古学にとって古い課題であった。そして先学諸氏の間で多くの論文をみた。そしていまここに西南日本を主体として浅学をかえりみず小稿を草することにした。それには前記の如く、芹沢長介、江坂輝弥、鎌木義昌などの御教授の他、研究系譜についての戸沢充則の論文、そして最近の鈴木重治の「発生期土器の地域相」<sup>25</sup>などが参考論文として大いに論考の資料となった。これら諸氏に感謝する。

〔註〕

- ① 杉原莊介・芹沢長介「神奈川界夏島における縄文文化初頭の貝塚」明治大学文学部研究報告 考古学①、一九五七
- ② 芹沢長介・鎌木義昌「福井洞穴調査報告」(図録篇)長崎県文化財調査報告書四集 一九六九、その他
- ③ 江坂輝弥「上黒岩遺跡」日本の洞穴遺跡 日本考古学協会洞穴遺跡調査委員会(代表八幡一郎)一九六七、その他
- ④ 山内清男・佐藤達男「縄文土器の古さ」科学読売一四卷一二号、山内清男他「日本原始美術」五 講談社 一九六五
- ⑤ Sonia Cole, 'The Neolithic Revolution', British Museum Natural History Ⅲ, 1963
- ⑥ 鎌木義昌「縄文式土器、縄文文化の起源について」岡山理科大学紀要第二号 一九六九
- ⑦ 芹沢長介「旧石器時代の終末と土器の発生」信濃第十九卷第四号 一九六七
- ⑧ 江坂輝弥「日本先史地理学序説」史学第四十卷 第二、三号 一九六七
- ⑨ 江坂輝弥「日本最古の土器文化」考古学講座三「先史文化」雄山閣 一九六九
- ⑩ 湊正雄・井尻正二「日本列島」岩波新書 一九六六
- ⑪ 岩尾松美・酒匂義明、「速見郡山香町大字広瀬川原田洞穴の調査」大分県地方史第三四号 一九六四、賀川光夫「川原田洞穴」日本の洞穴遺跡 日本考古学協会洞穴遺跡調査会(代表八幡一郎)一九六七

- 12 芹沢長介「日本の旧石器<sup>(1)</sup>」考古学ジャーナル 二〇 一九六八
- 13 芹沢長介「日本の旧石器<sup>(7)</sup>」考古学ジャーナル 八 一九六七
- 14 芹沢長介「日本の石器時代」科学 一九六九 六
- 15 智川光夫・久保山教善「所謂姫島系黒石の石器利用の上限について——大分県原田岩陰遺跡調査を主として——」九州考古学 昭和三八年西日本史学会発表要旨 一九六四
- 16 八幡一郎・智川光夫「早水台」大分県文化財調査報告三 一九五五、八幡一郎稿「続早水台」、Y. K. I. S. O. 調査区縄文早期の遺跡、遺物二、石器(鎌木義昌)大分県文化財調査報告十二輯 一九六五
- 17 江坂輝弥「考古学講座」三、先史文化「日本最古の文化」雄山閣 一九六九
- 18 智川光夫「石器の下限」古代文化 第二十一卷七号 一九六九
- 19 麻生傳・内藤芳篤「長崎県岩下洞穴」『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会洞穴遺跡調査会(代表八幡一郎)一九六七
- 20 江坂輝弥「縄文時代の日本の東と西」解釈と鑑賞 日本の東と西 至文堂 一九六三
- 21 鎌木義昌「縄文文化の概念——三、縄文文化の起源と年代に対する考察——」日本の考古学 三 河出書房 一九六五
- 22 鎌木義昌論文「縄文式土器、縄文文化の起源について」岡山理科大学紀要第二号 一九六六
- 23 芹沢長介「関東及中部地方に於ける無土器文化の終末と縄文文化の発生に關する考察」『駿台史学』四号 一九五四
- 24 戸沢充則「縄文文化起源論の系譜」考古学研究会十周年記念論文集「日本考古学の諸問題」一九六三
- 25 鈴木重治「日本における発生期土器の地域相——九州地方——」『歴史教育』一九六九年八月号